

令和２年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

本年度の活動				具体的な手立て	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育研究	公開研究会	「社会の変化に対応できる生徒の育成」～SDGsを核に資質・能力が伸びる取り組みを目指して～ 【本公開】 ・２月に開催予定。 ・HPに案内や当日の様子を掲載する。 ・参加者に授業を観ていただき、生徒の様子等から研究テーマ・サブテーマについて助言をいただく。	・全体研究会にて職員が現状や課題について認識を出し合い、各教科等とSTEPを関連づけながら授業実践を進める。 ・教育行政の動向を見ながら、汎用性のある研究を目指す。 ・本公開の参加申込書をHPに掲載することで参加を容易にする。 ・県内の各教科研究会に職員の参加を促し、本公開への参加を働きかける。	・新型コロナウイルスの影響で、本校へ参集していただく形での公開研究会は中止し、本時研究について研究紀要でその成果の一端を発信する予定である。 ・２月の学校公開デーが実施できるのであれば、STEPの発表会を実施したいと考えている。 ・今後も国・県の教育施策を見据えながら汎用性のある研究となるよう研究を進めていく。	【成果】 ・本次研究について、研究紀要を作成し、研究内容や成果の一端を発信することができた。 【課題】 ・積極的な情報発信、広報活動を今後も行っていく。 ・カリキュラム・マネジメントを推進し、各教科間や各教科等と総合的な学習の時間での探求学習（STEP）との往還を深めていく。	・新型コロナウイルス感染症拡大の中、休業期間があり、例年と異なる教育活動となった。公開研究会は中止されたものの、研究の成果を研究紀要にまとめたことは成果である。今後はその成果をWeb上でも公開することを検討してほしい。	・大学の先生方に指導助言を仰ぎながら、研究を更に深化発展させるとともに、コロナ禍の状況のもとで、公開の方法を工夫する。 ・今日的な課題を取り上げていることから、保護者、行政機関及び企業等に対しても情報発信、広報活動を進めていく。	
	日々の研究	・資質・能力の育成という視点に立った教育研究を推進する。 ・大学の先生方と共同での授業、本校の研究への助言、大学生の講座などさまざまな連携を行う。 ・文部科学省、三重県教育委員会等の開催する研究・研修会に積極的に参加する。 ・県外の附属中学校の公開研究会など先行している研究を行っている研究会に参加する。	・学期ごとに１人１回以上の授業公開を行う。各教科においても教科部会を定期的に行い、研究を深める。 ・授業記録やデータをもとに事実に基づいた研究をすすめる。 ・大学の先生方に授業をしていただいたり、大学生による授業の補助を活用する。本公開に向けての事前指導をいただく。 ・大学の講座の一環として大学生の授業参観を積極的に受け入れる。	・教室内が密にならないように配慮しながら、各教科の授業研究会を行っている。授業者は、指導案を作成し、抽出生徒、資質・能力、STEPとの関わり等の視点から授業を計画、実践し、事後協議会で子どもの姿から授業について振り返りを行っている。 ・１０月以降に徐々にであるが、参観人数の制限をしたり、オンラインを使って、家庭科や社会科で大学生の授業参観を受け入れている。今後は大学の先生に教科の授業をしていただく等の連携も図っていく。 ・教育行政の動向を把握するために県内全域にわたって副校長による教委訪問を行った。	【成果】 ・各教科等とSTEPで共通した内容の「まなびスケール」を活用することで、資質・能力の汎用性を確かめることができた。 ・子どもが「まなびスケール」を活用して、自ら伸ばしたい資質・能力を意識して学習に取り組む実践を提案できた。 ・各教科間のつながり、各教科等とSTEPのつながりを意識した授業実践が、前次研究と比較してより活発に行われるようになった。 【課題】 ・子どもに育成したい資質・能力が、各教科等とSTEPとを往還しながらより高いものになったかどうかの分析、検証が十分にできていない。 ・現在の状況下で、STEPでの探求学習について計画したことを発表（公開）する機会をほとんど設けることができなかった。	・「まなびスケール」を活用したことが、教員にも生徒にも、授業実践や学びを検証するうえで有効な手立てになったと思われる。 今後この「まなびスケール」を検証し、子どもにどのような力を付けたいのか明確にしてほしい。 ・壁新聞の内容を拝見し、教科で学んだことを生徒自身の生活の中に置き換えて考えることができているように思う。	・育成したい資質・能力について教員や生徒と共通理解を深める。 ・STEPでの学びが各教科に生きるために、各教科等の授業の一層の充実を図る。 ・前次研究を深化発展させるために、授業記録やデータに基づいた研究を推進する。	
学習指導	少人数指導	・１・２年生英語科で少人数教育を実施する。 ・１・２年生数学科で、TTを実施する。	＜英語科＞ ・指導内容によって１クラス３６名を２教室に分けて少人数指導を行う、TTで指導をする等、より効果的な方法で指導を行う。 ・１年生は中１ギャップの視点で支援するため、さらに小グループでの学習機会を設定し、個に応じた指導を行う。 ＜数学科＞ ・T１、T２の役割分担を固定せず、時には生徒の立場で発言することで授業を活性化し、生徒の理解及び思考の深まりを目指す。	＜英語科＞ ・１年生ではTTによる授業、２年生では１クラスを２教室に分けて授業を行った。ペアやグループでの学習を多く取り入れ、積極的に英語を話す機会を増やしている。 ＜数学科＞ ・１、２年生でTTによる授業を行った。 T１、T２の役割を柔軟に変えて授業を進めることで、生徒の対話が促進され、理解や思考の深まりが見られた。	＜英語科＞ 【成果】 ・生徒は、ペアやグループ学習の中で互いに質問がしやすく、一人ずつの発表の機会が多くあるため、英語を積極的に使う姿が見られた。 【課題】 ・生徒個々の理解度やつまづきを把握して的確な指導を行う必要がある。 ＜数学科＞ 【成果】 ・２人の指導者のかけあいを見て、生徒が疑問を持ったり、自分で考えたり、仲間と話し合うなど主体的な姿が多く見られるようになり授業が活性化した。また、このスタイルで授業を行うことで教員のスキルアップにもつながっている。 【課題】 ・生徒一人ひとりの理解の状況やつまづきの実態を的確に把握し、個に応じたきめ細やかな関わりや助言を一層充実させていく。	・少人数教育は生徒にとっても教員にとっても効果がある。しかし、その効果を検証する手立てがわかりにくい。今後、どのように改善しながら少人数教育を展開していくのか、例えば数学と英語の２教科だけでよいのか、生徒一人一人に応じたきめ細かい指導はどうしていくか、TT指導や１学級を２つに分けて指導する方法を、年間で固定することなく柔軟に生徒に合わせて展開していけるのか等、研究の深まりが望まれる。 ・授業を拝見し、ペアやグループで話し合ったり、生徒がテーマに沿って自分の考えを発表している様子を見ることができた。話し合うこと、考えを述べることが実践できていると思われる。 先生の指導、もっていき方もうまくいっているように思われる。	・少人数教育の効果について検証し、指導方法の更なる工夫改善を図る。	
	学習環境の整備	・学び合う仲間が育つ学級・学年づくりを推進する中においても「つながりあう個」の理念を大切にし、一人ひとりをしっかりと育てる教育実践をする。 ・ICT機器の充実をすすめ、授業の質の向上、効率化を目指す。	・プロジェクターや書画カメラ等のICT機器を充実し、授業の質的向上を図るとともに、家庭においても生徒の学習をサポートするために、１人１台タブレットを配備することを目指す。 ・各教科で必要な備品もできる限り整備できるよう予算を工夫する。	・生徒一人につき１台のi-padを配備して、今後は学習への効果的な活用を進めていく。 ・三重大学と津市教育委員会が連携して、双方向のやり取りができる大学のMoodleを活用した「津市e-learningポータル」を立ち上げ、津市内や附属学校の児童・生徒にオンラインで学習支援を行っていく。 ・各教科で活用できるようにICT機器の充実を図っている。	【成果】 ・GIGAスクール構想により、生徒１人１台タブレットが配備（３月末導入予定）され、学習への効果的な活用を図る環境が整いつつある。 ・Moodleを活用した学習支援を推進した。 ・教員用の１人１台パソコンの更新を行い、校務の効率化、安定化を図った。 ・ビデオプロジェクターを高輝度のものに更新した。 ・美術室の机の天板を取り替え、学習環境を整備した。 【課題】 ・タブレット導入に伴い、セキュリティポリシーの改訂やタブレット活用のルールづくりを進める。 ・今後も優先度を精査しながら全て教科のICT器機の充実を図っていく。 ・タブレット端末活用に係る教員研修を推進する。	・GIGAスクール構想によるすべての教育へのタブレット端末利用を積極的に進めてほしい。 ・GIGAスクールの進捗状況が不明ですが、前に進んでいることは確かであり、評価できると思います。 ICT機器等を導入することは、導入して終わりではなく、ハード・ソフトのメンテナンス、バージョンアップ等が必要不可欠であるので、予算化するなどの対策を並行して進める必要があると思われる。	・タブレット端末を効果的に活用し、授業における深い学びや、学びの個別最適化をつなげていく。 ・津市e-Learningポータルやロイロノート等の活用や、オンライン授業の実施、校務のデジタル化を進める。	
教育実習		・円滑な教育実習を実施するために、大学との連携を深める。 ・実習生の指導を通して、教師自身の指導力向上に努め、生徒理解を深める。 ・教職大学院生の実習を積極的に受け入れる。	・本年度は、９月と１０月に４週間、２週間の実習を行う。事前指導で教科指導や学級経営指導を行い、メールで実習生と丁寧にやりとりして指導案指導など実習開始までの準備をしっかりとらせる。 ・教育実習の期間を研究の一環として位置づけ、実習生の教科指導を通して教員自身の授業を見直し、実習生の授業参観を通して普段とは違った角度からの生徒観察を行い、生徒理解を深める。 ・教職大学院生の研究内容を共有し、その研究に積極的に協力する。	・実習生が本校を訪問して対面で実習する代わりに６月実習、９月実習ともにメールやzoom等のオンラインでの事前指導や特練を行い、実習生全員が無事に実習を終了した。実習困難な学生への対応についても大学と連携しながら最後まで取り組ませることができた。 ・１月２７日までに７名の教職大学院生を受け入れ、大学院生の要望を聞きながら、授業公開やインタビュー、個別指導など積極的に協力している。	【成果】 ・９月から１０月初めに２週間と４週間の実習を期間を短縮して、メールやオンラインを活用しながら１１０名をこえる実習生が最後まで実習を行うことができた。 ・７名の教職大学院生が附属実習を行い、それぞれの学修テーマの深化とともに、校種の違いを通した学びを進めることができた。 【課題】 ・来年度も今年と同じ状況が予想されるため、事前に大学との連携を十分に図っていく。	・コロナ禍の中で、メールやオンラインを積極的に活用し、１１０名を超える教育実習生の実習を実施したことは評価できる。 ・学生から教師になるための大事なステップだと思います。コロナ禍で何かと大変だと思いますが、今後も学校、大学、学生が様々な工夫をして、より実戦的な教育実習がなされることを期待する。	・実習生一人ひとりに対応して教育実習を充実させるために、事前の情報共有や、教育実習を一層充実させていくために、大学との連携を一層密にしていく。	

令和２年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
キャリア教育	・職業調べの実施（１年） ・ＳＤＧｓに関わる講演会や体験学習の実施（１年） ・震災に関わる体験活動の実施（２年） ・租税教室の実施（３年） ・命を大切にする授業の実施（３年） ・幼稚園訪問の実施（３年） ・進路希望調査の実施（３年） ・オープンスクールへの参加（３年） ・進路説明会の実施（全学年） ・教育相談、進路相談の実施（全学年） ・保護者懇談会の実施（全学年） ・大学附属連携事業の活用（全学年）	・道徳、特別活動、総合的な学習の時間を計画的に活用する。 ・教育相談、進路相談、保護者懇談会、進路説明会は、例年通り学校行事に位置づけて実施する。 ・幼稚園訪問は、家庭科と連携して行う。 ・進路希望調査、オープンスクール参加は、３年の進路指導の中で実施する。 ・租税教室は、３年社会科が税務署と連携して実施する。 ・命を大切にする授業は、大学の救急救命との連携で実施する。 ・震災に関わる体験学習は、社会見学时に実施する。	・全学年でキャリアパスポートを作成し、過去の自分を振り返り、自身の成長や変容がわかるようにして、将来に生き方を考える手立てとした。 ・年度当初に学校行事、教科、道徳、総合的な学習、特別活動の時間数を調整し、バランス良く実施できるように計画した。 ・家庭科の授業と連携した幼稚園訪問や附属病院救急センターと連携した「命の学習」は状況を見ながら実施に向けて検討している。 ・３年修学旅行の一環で広島とオンラインを結んで平和宣言を行い、折り鶴を献納して平和学習を実施した。また、被爆者で平和活動をされている講師の方の生き方に触れることができた。 ・２年社会見学が中止のため、「防災学習を」本校体育館で行った。 ・１年生は、福祉体験学習に代わる自然体験学習を３学期に県南部で実施し、産業やそれに従事する方について学ぶ取組を計画している。	【成果】 ・全学年のキャリアパスポートの取組は、年度当初の計画通りに実施できた。 ・修学旅行や社会見学は、計画通りに実施できなかったが、何とか実施可能な方法を模索して、コロナ禍の状況の中でできる形に工夫して実施した。 【課題】 ・修学旅行や社会見学、福祉体験等の体験学習や大学と連携した取組が、計画通りに実施できなかった。来年度も同様の状況が予想されるので、状況に応じて工夫改善を加えて実施できる方法を模索していく。	・全学年のキャリアパスポートの取り組みを計画通り実施できたことは評価できる。今後も生徒自身の将来の生き方を考える手立てになるよう積極的に活用してほしい。 ・コロナ禍の状況の中で、計画が縮小されたが、生徒にとって少しでもプラスとなるように考えて実施したことはよかった。 ・来年度も、同じような状況も予想されるので、あらかじめ事態を予想しながらすすめてほしい。 ・教室だけでは学べないこと、生活していく上で必要なことを学ぶことができるので、現状に満足することなく充実させていきたい。 - コロナ禍の中で、できることが限られると思いますが、できることを見極めて実践していただきたい。	・キャリアパスポートを活用して、生徒が汎用的な力を身に付けられるよう、年度や学期の節目でのめあての設定・確認、取組についての振り返りを中心に指導・支援していく。
生徒指導	・いじめの未然防止と早期発見に努める。 ・ネットモラルの指導を進める。 ・生徒指導部を中心に、全校での指導体制づくりと情報共有を行う。 ・部活動、交通安全指導、防災教育について生徒指導部会が中心となって取り組む。 ・集団の育成と活気ある学級づくりを行う。 ・生徒会と連携して「あいさつ十一言運動」に取り組む。	・ひやかし、からかい、悪口等もすべていじめととらえて、報告するよう全職員に周知・徹底する。 ・生徒指導部会を週１回開催し、報告シートをもとに常に情報共有・共通理解を図ることで、統一した指導を進める。 ・部活動ガイドラインに基づく部活動への取組、交通安全指導、防災教育の取組を統一して進める。 ・学級での係活動や班活動の充実を図り、一人ひとりが活躍できる場を設定する。 ・あいさつ運動では、教師から積極的にあいさつを行い、かならず一言加えることを意識する。	・いじめの早期発見に向けて、定期的ないじめ調査を実施し、いじめが認められた場合は、適切に解決を図り、その後の経過を見守っている。 ・報告シートの活用を進め、情報共有・共通理解を図り、組織的な対応を推進している。 ・一斉下校時の交通指導の取組や本校単独の避難訓練を実施した。 ・あいさつは、教員自らが全ての生徒に積極的にあいさつしていくことを確認して取り組んでいる。 ・各学年、各学級で工夫をしながら集団の育成を図っている。	【成果】 ・附属学校園共通の「いじめ防止基本方針」、「いじめ防止対策年間計画」を作成し、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に的確に取り組むよう教員の意識を向上を図った。 ・時間割の中に週１回設定された生徒指導部会で、いじめをはじめとした情報共有が図られている。 ・生徒指導部を中心に一貫した指導体制と情報共有は図られている。今後も学年の枠を越えた情報共有や指導が一層図れるような全校指導体制を目指す。 【課題】 ・あいさつについては、まだ十分とは言えないので継続して取り組んでいく。	・附属学校園が共通して「いじめ防止基本方針」、「いじめ防止対策年間計画」を作成し、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に的確に取り組むよう教員の意識を向上を図ったことは意義深い。つねにいじめは起こりうるという意識をもって、今後も教員間の情報共有を図り、きめ細かく取り組みを進めてほしい。 ・いじめの未然防止、早期認知の取り組みがうまくいっていると思われる。ただ、これらの取り組みには、ゴールや正解はないと思われるので、取り組み内容のレベルアップを心がけていただきたい。 - あいさつはコミュニケーションの基本であり、人に言われてするのではなく自然とできるように、生徒の気づきが得られる取り組みも必要と思われる。	・生徒指導部会や職員会議等学年を越えた迅速な情報共有とともに、適切な指導が行えるよう全校での指導体制を今後も継続していく。 ・あいさつについては、生徒会とタイアップして取り組むとともに、教師自ら率先してあいさつをすることにより、生徒に気づかせていく。
道徳教育	・各学年ごとに年間指導計画を作成をし、指導内容や指導法についての工夫や考える道徳、話し合う道徳についての実践を重ねる。特に、命を大切にすることを推進する。 ・道徳教育推進部会を中心に、昨年度に引き続き学校全体で適切な評価方法について研究する。	・道徳科との関連を意識しながら、各教科における道徳教育のねらいを明確にする。 ・各学年で道徳の授業案の作成を積極的に行い、定期的に学年相互の授業参観を行う。事後検討会により指導の改善を図る。 ・研修会への参加や先進校への視察により、道徳教育の研修を進める。	・道徳の指導案を各学年で検討し、指導方法の工夫を図り、「考え、議論する道徳」を推進した。 ・１１月に授業研究と検討会を実施して、成果と課題について明らかにするとともに、評価についても検討した。	【成果】 ・道徳の指導案を学年会で検討し、「考え、議論する道徳」を実施した。生徒はペアワーク、グループワーク、全体交流等を通して、自己を見つめたり、物事を広い視野から多面的・多角的に考えたり、人間としての生き方について考えを深めたりすることができた。 【課題】 ・昨年度、道徳科に関する評価の基本的な考え方を道徳教育推進部会で作成したが、より適切な評価のあり方について今後も検討していく。	・道徳科の授業が活発に展開されていることにより、子どもたちが自己の生き方について考えを深めることができつつある。今後も、適切な評価の在り方の検討も深めながら、道徳科の研究を深めてほしい。 ・ペアワーク、グループワークで人と話す、人の話を聞くことの重要性を身につけていっていると思われる。	・特別の教科「道徳」の指導と評価について、実践的な研究を深めていく。
特別支援教育	・生徒一人ひとりの実態、教育的ニーズ及び保護者の思いを把握し、長期的な視点を踏まえながら、適切な対応を図る。	・特別支援学校と運動会や文化祭などの学校行事を通して生徒同士の交流を行う。 ・特別支援部会を週１回開催し、ＳＣとの情報共有を図る。また、ＳＣと学年集団との情報共有の場を学期に１回設定する。 ・特別な支援が必要な生徒について、個別の支援計画を作成する。 ・ケース会議を実施する。	・現況下では、学校行事を通しての特別支援学校との交流は見合わせている。 ・部会の定期開催、ＳＣとの情報共有は昨年同様に実施している。 ・個別の支援計画については、保護者の同意が得られ次第順次作成する。 ・ケース会議が必要な場合があれば、今後も継続的に開催していく。	【成果】 ・特別支援部会の中では、情報共有を図りながら支援を必要とする生徒の一部を外部の関係機関につなぐことができた。 【課題】 ・学校全体で困り感をもった生徒や支援を必要とする生徒の情報共有や支援体制づくりは、まだ不十分である。個別の指導計画、支援計画についても現段階では作成できていない。	・特別支援教育の充実とは、だれもが学びやすい教育の展開につながる。今後も特別支援学校を含め外部の関係機関との連携を密にしながら充実してほしい。 ・特別支援学校との交流の場があることで、感じるところ、考えるところがあると思われるので、今後も無理のない範囲で続けていただきたい。	・困り感を持った生徒や支援を必要とする生徒の情報共有し、具体的な支援の方法について共通理解を図り、継続して支援にあたる。 ・学校行事を通しての特別支援学校との交流の再開に向けて取り組んでいく。
国際理解教育	・教科や各学年、生徒会執行部や国際福祉活動部を通して、津ユネスコへの活動参加やＥＳＤ教育に取り組む。	・英語科で地域のことを英語で発信するワンペーパーコンテストに参加する。 ・各学年による平和学習、防災学習、福祉体験学習の取組について生徒が、宣言や俳句、個人新聞等で発信する。 ・津ユネスコ協会の行事に積極的に参加し、使用済みの切手やはがきを回収する取組を進める。	・本次研究の中核としてＳＤＧｓを教育活動に取り入れている。１学期に「withコロナ」をテーマにした校内発表を行った。「withコロナ」の視点から身近な問題や社会的な問題について生徒が班で話し合い、自分たちの考えを学級単位で発表した。各学級の代表は、リモートによる全校発表も行った。 ・各学年による平和学習や防災学習の取組について生徒が、平和宣言や俳句、個人新聞等で発信した。 ・英語科において、英語で「三重のゆるキャラ」を紹介する授業を行い、Moodleを活用して三重大学の留学生からコメントをいただいた。	【成果】 ・各学年の英語科においてＡＬＴとのティームティーチングや三重大学の留学生と英語でメールのやり取りをする機会（１年英語）を持つなど、英語を使用する必要感を持たせる場を設定できた。 ・ＳＤＧｓをツールにして地球規模の問題に目を向けることができた。 【課題】 ・海外の学校との交流を持てるようにしたい。	・研究の中核として取り組みを進めているＳＤＧｓを国際理解教育の中に取り入れて実践を重ねていることで、多様な活動ができるようになった。今年実施できなかった活動も含めて来年度の計画的な取り組みを期待する。 ・ＳＤＧｓに関する考えが、壁新聞等を拝見して机上の知識だけでなく、自分たちの生活の中に落とし込んでおり、生徒たちが本質を理解されていることがうかがえ、評価できる。 - オンライン等で海外の学校と交流し、他の国・地域の考え方などに触れる機会が得られることを期待する。	・教育活動の随所にＳＤＧｓの要素を取り入れながら、大学や企業、海外の学校との交流を計画していく。

令和２年度　三重大学教育学部附属中学校　学校関係者評価

	本年度の活動	具体的な手立て	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
教育相談	・学校生活における生徒の悩みや思いを把握して生徒理解に努める。 ・ＳＣ，養護教諭と連携しながら不登校生徒の対応を学校全体で進める。 ・教育支援センター等の外部相談機関と連携を進める。	・学期ごとに教育相談期間を設定し，生徒一人ひとりと教育相談を行う。 ・ＳＣとの情報共有を密にし，不登校生徒の困り感の把握に努める。 ・不登校生徒の学習機会の確保のために適応指導教室等の外部の相談機関と連携していく。	・学校に登校できにくい生徒で，今年度新たに１名が教育支援センターに通級している。 ・各学年とＳＣ，養護教諭との連携は，今年度も密に行っている。 ・ライフの指導や学期ごとの教育相談では，コロナ禍で休校が長くなり不安や心配を抱えた生徒一人ひとりに寄り添い，悩みや困り感の把握に努めている。	【成果】 ・不登校生徒の中で教育支援センターへ通級することをきっかけに，学校へチャレンジ登校する生徒が見られた。 ・ライフ（日々の生活ノート）の指導や教育相談の中から生徒個々の悩みやいじめ，問題行動等を把握して指導につなげることができた。 【課題】 ・教育相談部会の中だけでなく全体への情報共有，連携を一層進め，生徒一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな対応を図るための支援体制の充実を図る。	・日々の生活ノートの取り組みや教育相談期間の設定，教育相談部会，ＳＣや教育支援センター等外部機関との連携等，きめ細かな取り組みが効果的に機能しはじめた。今後も継続的な取り組みを期待する。 ・不登校の生徒など，画一的なサポートではなく，生徒個々の状況に合わせたサポートを行っていると思われる。	・全校生徒を対象とした計画的な教育相談及び生徒一人ひとりに寄り添ったタイムリーな教育相談を今後も継続する。
生徒会	・生徒一人ひとりが自ら学校生活について考え，見直し，改善する。生徒の自治を大切にする生徒会の運営を進める。 ・生徒主体の生徒会行事の企画・運営を行う。 ・あいさつ運動等の日常活動を充実する。 ・ユネスコや赤十字の活動へ積極的に参加する。	・学級会→生徒議会→（拡大生徒議会）→学級という流れを行事予定に位置づける。 ・生徒会だよりの発行による情報発信を行う。 ・意見箱によって生徒の自由な意見に耳を傾ける活動を継続する。 ・昼休みに体育館を開放して，生徒同士の交流を図る。	・文化祭や附中のハーモニーは中止としたが，体育祭は規模を縮小し，生徒会執行部を中心に工夫しながら実施した。 ・生徒議会や活動部会を毎月１回行い，withコロナの学校生活について見直し，改善する手立てを今後考えていく。 ・あいさつ運動，清掃活動，意見箱など校内の日常活動には，熱心に取り組んでいるが，これまで参加していた赤十字やユニセフ主宰の研修会が中止となって活動できていない。	【成果】 ・体育祭は，規模を縮小し，時間も短縮して生徒会を中心に実施できた。 ・あいさつ運動をはじめ，校内における日常活動にしっかりと取り組めた。 【課題】 ・来年度に向けて，今後の状況を考慮しながら行事の企画や運営について見直し，活動の充実を図っていく必要がある。 ・赤十字やユニセフの活動へは今後も積極的に取り組んでいく。	・コロナ禍の状況の中で，生徒会活動も年度初めの計画通りには進まなかったが，その中でも生徒による取り組みができたことは来年度につながると考える。	・生徒が主体的に取り組む体育祭や文化祭等の学校行事や，年間を通したあいさつ運動について，今後も継続する。
教育環境づくり	・働き方改革に積極的に取り組む。 ・校内美化と施設設備の安全管理に努め，教育環境を整える。 ・風通しの良い職員室文化を醸成する。	・時間外労働時間確認シートを活用し，総勤務時間の縮減に努める。 ・防災の視点から施設設備の改善と危機管理マニュアルの見直しを行う。 ・保護者とともに防災会議をもち，備蓄品の整備を進める。 ・年間２回のクリーン大作戦（除草作業）を保護者，生徒とともにに行い，協力して学校環境の整備に努める。 ・報告・連絡・相談を徹底をし，職員間の意思疎通を図る。	・夏休み期間に第１体育館と武道場のトイレ改修により，洋式のトイレに改善された。 ・例年実施しているクリーン大作戦は，今年度は実施できなかったが，業者に依頼して体育館や球技場の斜面の除草を２回行った。 ・働き方改革の具体的な方策の１つとして，部活動の活動日や活動時間の適正化による勤務時間の縮減を行った。（平日２日の休養日，完全下校時刻最大１７：３０）	【成果】 ・施設設備等の改善を大学に要望し，第１体育館と武道場が洋式のトイレに改修された。 ・GIGAスクール実現に向けて校内ネットワーク整備の改修工事が施工された。 【課題】 ・コロナ禍の対応として自動水栓を要望していく。 ・教職員の健康を守り，ゆとりをもって生徒に接していくための働き方改革に取り組んでいく必要がある。	・学校全体を点検し，生徒の生活実態にそぐわないものがないか，早急に見直す必要がある。 ・コロナ禍で学校の業務も激変し先生方も大変だと思います。ハード・ソフト（施設整備ややり方）の改善等により，手間ひま・コストが削減できるものがあれば積極的に導入されたい。 - 働き方改革の面では，部活の活動時間のルール化は評価できると思われる。	・生徒の安全が確保され，よりよい学習環境に向けて施設設備等の改善充実を継続して進めていく。 ・働き方改革を推進し，部活動の活動時間や休養日の遵守，定時退校日又はMy定時退校日の設定，休暇取得の促進及び会議の時間の短縮等により，総勤務時間の縮減を図る。
開かれた学校づくり	・学校評議員会（学校関係者評価委員会兼任）を開催し，学校自己評価・関係者評価の活動を通して，学校運営を見直す。 ・学校通信，学級・学年だより，進路通信，保健だより等の発行による情報発信に努める。 ・ＨＰの更新に努める。	・学校評議員会を年３回開催し，学校運営についての意見を集約する。また，ＰＤＣＡがしっかりと機能する学校関係者評価を作成する。 ・各種たよりによる情報発信と学校アンケートやいじめアンケートの公表等で情報提供を行う。 ・ＨＰの更新作業が出来る職員が各学年１名以上となるようＯＪＴを行っていく。 ・育友会の活動をＨＰで紹介したり，運営に関して教員も積極的に助言・参加したりすることで，活動を活性化する。	・学校評議員会は，計画通り年３回開催する。各評議員の意見を集約し，学校運営に反映できるよう努めている。 ・学級通信，学年だより，学校通信，ＨＰによる情報発信を行っている。また，全生徒，保護者に学校評価に係るアンケートを実施した。その結果を学校経営に生かしていく。 ・育友会と連携したクリーン大作戦や非常食の試食といった活動が中止となったが，防災管理部の防災備蓄庫点検や図書部の活動，編集部「きづな」の発行等の活動へ協力していく。	【成果】 ・学校評議員会を計画通り３回開催し，各評議員から学校運営について意見や助言をいただいている。 ・各種通信やＨＰによる情報発信を行った。特に，４，５月の休校期間の課題や諸連絡，本校の入試の情報提供においてＨＰを活用した。 ・育友会の活動は当初の計画通りにはいかなかったが，防災管理部や図書部，編集部等の活動へ協力できた。 【課題】 ・今年度の状況から学校からの情報発信の方法や育友会の活動をデジタル化していく。	・今年度の状況から，今後ますます情報機器を活用したWeb上での発信が求められる。積極的な取り組みを期待したい。 ・生徒，保護者へのアンケートが継続的に実施されており，学年別動向，あるいは時系列での評価ができ，対応策検討の基礎とできるので，今後も継続して実施されたい。 - 職員向けアンケートも実施されており，時系列での評価等がなされている。項目によっては，すぐには効果が出ないものもある。課題把握⇒対策⇒評価の繰り返しが必要であり，この動きが目に見えることで，改善に向けて行動が続けられると思われる。	・情報発信について，デジタル化への取組を今後も継続する。